

震災資料・記録編さんをめぐる動き

去る2月27日(木)、震災記録に関する協議が尼崎市立地域研究史料館でおこなわれました。参加者は12名。協議では、21世紀ひょうご創造協会の佐々木和子・伊藤亜都子両氏から同協会の避難所資料収集の取り組みや、神戸市長田区役所での震災資料コーナー設置の動きなどが紹介されました。ここでは、佐々木・伊藤両氏らのひとつひとつの避難所を回りながらの地道な調査活動のあり様が披露されると同時に、しかし他方で、同じ趣旨のもとに震災資料の調査・収集を行なう機関が増え、これらとの間でお互いに競合を避けるために今後いかにして連絡調整をとっていくかといった問題が指摘されました。また、同日の協議では、ライブラリアンネットによる公共図書館を対象とした新聞保存状況のアンケートのまとめ、神戸大学の「兵庫県南部地震に関する総合研究」の中での震災記録保存に関する研究の立ちあげの動き、などが紹介されました。今後は今回の協議を踏まえて、昨年2回にわたって開催した「震災記録の保存と編さんに関する研究会」の第3回を開催する方向で検討していきたいと思えます。

また、震災資料問題については、昨年11月、自治体による震災記録集として、西宮市『1995.1.17 阪神・淡路大震災—西宮の記録—』が刊行されました。これは、同市総務局行政資料室の編集になるもので、7章からなり、地震の発生から被害状況、応急対策、復旧作業から今日における復興の取り組みまでを、豊富な資料をもとに記録しています。本書の特徴は、同市の公文書、市政ニュースからピラ・看板の類まで、様々な原資料を駆使し、単なる数値の羅列にとどまるのではなく、客観的でありながら、しかし実に生き生きと同市の震災への取り組みをあとづけたことです。今後尼崎市などで同様の記録集の刊行が予定されていますが、同書がこれらのうごきに一石を投じることになるのは間違いありません。

(文責・尾崎耕司)

震災後の古書市場の動向

現在、サブプロジェクトのひとつとして震災後の古書市場の動向に関する調査を行っています。

一昨年、史料の巡回調査で被災地を歩いた我々は、史料が処分されていたことに大きな衝撃を受けました。市民がなぜ、史料を処分したのかについて、市民の歴史意識の問題や、歴史学研究者と市民の意識のギャップの問題については一定の議論の蓄積を見たと思えます。しかし、所蔵者が史料を処分した理由を検討してみると、市民と歴史学研究者や史料保存機関の関係だけで論じられない問題もありました。それは、「骨董商が買いに来たから売った」というケースです(寺田匡宏「被災地の歴史意識と震災体験」『歴史科学』146、1996年参照)。

震災後、被災地には全国から骨董商が押し寄せたといわれています。事実、巡回調査で被災地を歩いた我々は、骨董商の噂をしばしば耳にしました。

震災発生から2年が経過し、古書店の発行する古書販売目録に、阪神地域の古文書を目にするものが多くなってきました。これらが、震災関連のものか、速断は出来ませんが、震災後の古書市場の動向に関しては、情報を集約し実態を解明することが必要だと考え、調査をはじめました。

現在は、古書店の発行する目録を収集しての全体的な市場動向の把握、被災地の自治体への調査などを行っています。また、古美術商への聞き取りも試み、古書の市場での流通ルートの確定作業にも取り組んでいます。これらの作業を通じて、史料保存関係者から、古書市場の問題に関する意見交換の場が必要との声が寄せられています。また、この問題は、被災史料の問題であるだけでなく、昨今の「お宝」ブームなどとも関係する、現代社会における史料保存の基盤に関わる問題だと考えます。本調査がある程度まとまった時点で、史料保存関係者や古書業界関係者を交えた情報交換会を開催することを考えています。

現在、調査を進めているところです。何か情報がありましたら、史料ネット事務局までお知らせ下さることをお願いします。

(文責・寺田匡宏)